

地域に根ざしたワイン産業の創出を目指して

名 称：とみおかワイン葡萄栽培クラブ（代表 えんどう 遠藤 しゅうぶん 秀文）

所在地：双葉郡富岡町

【富岡町の避難指示解除状況】

平成 29 年 4 月 1 日 避難指示解除準備区域及び居住制限区域が解除

【プロフィール】

醸造用ブドウの試験栽培に取り組むため、平成 28 年 5 月にクラブを設立。まちづくりの一環としてワイン産業の創出を目指す。

【震災前の経営と避難状況】

富岡町生まれの遠藤さんは大学卒業後、東京の大手建設コンサルタントに就職。平成 19 年に帰郷し、父親が経営する測量会社に勤務。原発事故で家族とともに岐阜県へ避難。10 日ほど県内に戻り、事故後 1 か月で郡山市内で営業を再開させました。

【設立の経緯】

遠藤さんは長い海外勤務の経験から、故郷である富岡町を活性化させるには、町内の多様な食材を活かすワイン産業が必要と考えていました。震災後、「ワイン産業は、まちづくりの一環として新たな産業となる。」と確信し、温めていた構想を実現させるため、平成 28 年 5 月、遠藤さんの想いに賛同した農業者、会社経営者など町内有志 10 名で、任意組織「とみおかワイン葡萄栽培クラブ」を設立しました。



クラブ代表 遠藤秀文さん
(小浜地区ブドウほ場にて)

【取組の内容】

平成 28 年、富岡町内の小浜地区と下千里地区の 2 か所に、醸造用ブドウの試験ほ場を 5a ずつ設置し、3 月～4 月に、各地区 200 本ずつ、計約 400 本を垣根仕立てで植え付け。その後、小浜地区では、平成 29 年春に約 200 本（10a）、平成 30 年春に 300 本（15a）を追加で植付けし、現在、2 地区合せて 35a に約 900 本のブドウを栽培しています。

栽培している品種は、赤ワイン用として「シラー」、白ワイン用として「シャルドネ」と「ソーヴィニヨン・ブラン」の 3 品種です。主な管理作業は、新梢誘引、芽かき、摘芯、摘房、防除、下草刈り等で、クラブ会員が作業するほか、年に数回、首都圏の民間企業の

ボランティアの支援を受けています。



クラブ員とボランティアによる苗木植付け作業
(とみおかワイン葡萄栽培クラブ提供)

これまでの3年間の試験栽培で、ブドウ栽培技術を習得するとともに、気象や土壌に対する品種適性を検討してきました。さらに、栽培技術と醸造に係る情報収集のため、県内での研修会やセミナーへ積極的に参加するとともに、先進地である山梨県、茨城県、山形県、宮城県の産地・ワイナリーを訪問し、研鑽を積んできました。

クラブとしての予算は限られていることから、平成28年度から「地域経済産業活性化対策費補助金(被災12市町村における地域のつながり支援事業)」(経済産業省)を活用して、先進地の視察等を行うとともに、川内村と連携して、「地方創生推進交付金」(内閣府)を活用して、試験ほ場の管理や研修会へ参加しています。

平成31年には、初年目植え付けた約400本が栽培4年目となり、ある程

度の収穫量が見込めることから、委託加工により、ワインの試験醸造を予定しており、遠藤さんは、「試験醸造で少量でもワインができれば、本格栽培に向けて弾みがつく。」と期待しています。

【関係機関の支援】

栽培技術については、中央葡萄酒(株)(山梨県)、双葉農業普及所及び福島大学の各機関から指導・助言を受け、気象観測・分析については、山梨大学ワイン科学研究センターの協力を得ています。



ほ場に設置している気象観測機器

【課題】

クラブ設立後、町内のほか、県内外からも加入者が増え、現在の会員数は30名に達しています。ただし、会員は皆、本業を持ち、町内の会員も平日はほとんど町外から通勤しているため、栽培管理は週末に限られているのが実情です。特に、適期防除ができず、病虫害が多く発生したり、統一的な樹形管理ができないことが課題となっており、これらの課題を解決するため、今後、ブドウ栽培の専門家を雇用することを検討しています。

また、これまでの試験栽培は、クラ

ブ会員を中心に民間主導で取り組んできましたが、今後、規模を拡大して本格栽培に転換し、ワイン事業を展開するには、行政を始め、町内の関係機関からの広範囲の理解と協力が必要と考えています。



垣根仕立てによるブドウ栽培

【目標・将来構想】

今後も試験栽培を通じて品種適性を確認するため、平成31年春に小浜地区の試験ほ場を更に20~30a拡大し、500~600本を追加して植え付ける予定です。ワイン事業をスタートさせる場合、ブドウ栽培面積は最低限4~5ha必要と考えており、将来は町内の耕作放棄地等を活用することにより、10ha規模に拡大することを目指しています。



平成30年春に新植したブドウ苗

遠藤さんは、「町の復興には、施設・

工場の建設等による即効性のある産業創出だけでなく、長い年月をかけて、地元根付く持続的な産業創出の両方が必要。」と考えています。後者としてワイン事業を創出することで、地域産業として雇用が生まれるだけでなく、帰還した町民がブドウ栽培やワイン醸造に長く関わることが出来ます。

町の復興については、「震災前に戻すだけでなく、前よりもっと魅力的なまちにする必要がある。」と言い、将来、富岡駅近くにワイナリーを建設できれば、大勢の観光客が見込まれことから、「観光による交流人口から移住による定住人口が増える。」と期待しています。さらに、ワイン産業が、地域産業として町に根付けば、「県内の他のブドウ産地やワイナリーと連携して、各地を巡る『ワインツーリズム』の開催も可能になる。」と夢を膨らませています。

最後に遠藤さんは、「高品質ワインを生産するためのブドウ栽培には30年~50年かかると言われる。富岡町にワイン産業を創出し、地域の財産として我々の世代から子・孫の世代に継承していきたい。」と決意を語ってくれました。

(平成30年10月)